

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 海老根 量介

本論文は、戦国時代から漢代にかけて中国で流行した「日書」を扱う。この時代は、春秋時代を受け官僚制が確立した時代である。六朝時代以後仏教や道教が盛んになる以前、一般に民間信仰の語をもって議論される霊的世界を念頭におきつつ、人々は自己が則るべき判断基準を、この「日書」に求めた。

本論文は、従来「日書」をめぐってなされてきた諸々の研究から出発し、「日書」の性格をより具体的に詰めるいくつかの論考からなる。「日書」自体は、仏教・道教盛行以後も存在し、その流れを汲む書籍が現代にもある。したがって焦点の宛て方次第で、さまざまな時代を反映する対象として検討できる。本論文は、「日書」を、戦国時代から漢代にかけてという時代の歴史的性格の一端を明らかにする素材として活用している。

「日書」には大きく分けて二つの系統がある。一方のみが後代に継承され、他方は滅びている。この二つの系統の違いとしては、地域的相違が注目されてきている。本論文は、さらに両者が用いられた場の違いに焦点を当てた。「日書」の特定の用語にしぼり、考古学的、古文字学的検討を加えて、流通の複雑さを想定しつつ、二つの系統の相違が時期的差異によるものにはならないことを確かめた。そして、従来想定されてきている一つの起源地から他への伝播という説明より、楚・中原等の影響や同時並行的編纂の実態を主とする説明に変更すべきことを提言する。

「日書」の二つの系統のうち、一方として議論できる楚の「日書」が封君や有力者を対象とした国家レベルの事柄を話題にし、従来の「日書」解釈すなわち「民間に流通していた中下層の人々のための書籍」という想定と齟齬することを述べる。この論点を掘り下げる目的から、従来の研究に新しい出土資料を加えて、楚の服属国と楚の県が同時並行して存在する状況を検討する。ここで検討対象となる「国」や封君、「県」は、楚の「日書」が話題にする有力者に他ならない。ところが、内容的に有力者を対象とする楚の「日書」が、下級官吏の墓から出土する実態を述べる。関連して、占術家が用いていたマニュアルが、徐々に一般の読者が参照し得る形に簡易化していること、県以下の地方行政において、職務遂行に「日書」を活用していたことを述べる。そして、楚の「日書」が有力者に広まった後、下級官吏に再利用されていたことを明らかにする。この点は、別の研究者が戦国時代の「仁」を重視する儒家と「道」を重視する道家の闘争を述べ、後者の実践者である「道者」が有力者と下級の者いずれをも含む表現であることとの関連が注目される。今後の発展が期待される。

審査の過程では、細部について様々なコメントがなされたが、本論文の積極的意義を否定するものではないことを確認し、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判断した。